

期 昭和五十九年一月二十三日～二月九日

於 図書館三階閲覧室（本館）

地獄草子

地獄草子は、地獄を主題とした大和絵で、平安末期から鎌倉初期の六道思想を反映して盛んに作られたものである。六道思想とは、一切の衆生が、善悪の業によって、おもむき住む六つの迷界。地獄・餓鬼・畜生・修羅・人間・天上の六界で、この六道の間を生死を繰り返して、迷いの生をつづけることを六道輪廻という。往生要集を撰し、浄土教を説いた源信によって、この六道思想は、広められた。地獄草子は、この六道の一つである地獄を描くことによって、救済手段としての浄土教への信仰を説いたものである。

○ 国宝 地獄草紙（複製絵巻）

（別置）

巻子本二巻（東京国立博物館本・奈良国立博物館本） 東京国立博物館本二十六纏 奈良国立博物館本二十  
六・三纏 東京 大修館書店 昭和四十八年刊 別冊解説あり

二巻とも、経典をわかり易く述べた詞書と、それに対する絵を加えた段落式の絵巻である。

(1) 東京国立博物館本

「正法念処経・地獄品」所説、叫喚大地獄の十六別所のうち、髪火流地獄・火末虫地獄・雲火霧処地獄・雨  
炎火石地獄の四所を描いたもので、この一連の地獄は、殺生・偷盗・邪淫のほか、酒に関する罪による人間  
の墮ちる地獄という点で特色があり、仏教における禁酒の戒律を強く打ち出したものである。この絵巻の筆  
者は常磐光長、詞書は寂蓮と伝えられているが、確証はない。旧安住院本。

(2) 奈良国立博物館本

この絵巻は、「起世経」所説の八大地獄の十六別所のうち、糞屎泥地獄・函量地獄・鉄磓地獄・鶏地獄・黒  
雲沙地獄・膿血地獄等七図を線本位の淡泊な色彩で描いている。全体に、現世で、人をごまかしたり、騙し  
たり、又、殺生をした罪人が、さまざまな責苦にあう、苦悶の表情を巧みに描きだしている。旧原家本。